卒業生より一言

移動図書館活動の盛衰

昭和44年度史学科卒業
新　　孝　一

私は1970年（昭和45）３月文学部史学科を卒業し、４月に徳島県立図書館の司書として採用された。配属先は読書普及係、移動図書館（Book Mobile）の担当であった。1970年から78年までの８年間であったが、その頃は、まだ県立図書館の移動図書館は活発に行われており、仕事は忙しくても毎日が充実していた。

移動図書館は自動車文庫とも称して、太平洋戦後アメリカから導入された図書館の館外活動である。自動車が現在とは比較にならないほど少なかった時代に、小型バスに図書を積んで各地へ運搬するやりかたは、館内中心の図書館活動を根底からひっくり返すほど衝撃的なデビューだった。徳島県では1949年に「文化バス」として登場、後に「移動図書館やまなみ号」として定期巡回を開始、長い間（38年間）県民に親しまれた。

徳島の場合、当初移動図書館では単に図書を貸し出すだけでなく、人形劇やレファレンスなどを含む分館的機能を行った。そのことが大きな特色であった。図書の貸出しを中心とした東の「千葉方式」に対して、西の「徳島方式」として全国的に注目される活動を行っていた。ちょうど1955年ごろから燎原の火のように広がった読書運動の最盛期とも重なり、移動図書館への要望が高まり、1962年には増車して２台となった。もっとも私が赴任した1970年には、図書の貸出しを中心とした業務に変更していたので、かっての「徳島方式」のイメージはほとんどなかった。どこにでもあるふつうの移動図書館であった。

ところが1975～80年ごろから、全国的に県立図書館の移動図書館は撤退し始めた。その理由は、①県立図書館が全県的なサービスを行うには移動図書館では非効率であること、②車社会の到来で自動車文庫の稀少価値が少なくなったこと、③県の移動図書館が活動しているが故に図書館設置の機運がそがれること、すなわち、市町村の図書館設置を阻碍していること、等が主な理由であった。また社会環境の変化、なかでもＴＶや情報メディアの普及により、住民の生活様式が多種多様となって、その結果移動図書館の利用は漸減の傾向にあった。徳島県とて例外ではなく、移動図書館のあり方が検討され始めた。

同じころ徳島では新館建設計画が話題となり、1984年に基本構想検討委員会が設置された。その際、特別委員であった前川恒雄氏（当時、滋賀県立図書館長）から、県立図書館の移動図書館はなるべく近い将来に廃止すべきである、との意見が出された。そして1987年（昭和62）をもって、38年間にわたって活動してきた移動図書館が廃止となった。

私にとって、二十歳代は移動図書館とともに過ごしただけに内心複雑な心境であった。その後、市町村立図書館を支援・協力するための具体策として、協力車（協力業務）が開始され、今日に至っている。それにともなって組織変更があり、読書普及係は廃止、企画協力係が新設された。ちょうど十年前である。ちなみに私は、最後の読書普及係長であり、初代の企画協力係長であった。

移動図書館に代わって、協力車が動き始めて十年経過した。協力車（協力業務）は新図書館の目玉のひとつであるが、このことについては今回は触れない。次の機会にのべることにしたい。

司書という仕事に就いて

平成４年度史学科卒業
楠　本　美　穂

就職して今年で７年目になります。もうそんなに経ったのかと、我ながら驚いてしまいます。就職した当初は、図書委員会や紀要発行など初めてのことばかりで失敗の連続でした。たった１人の司書ということもあり、責任の重さとプレッシャーで不眠症に陥ったこともありました。

それにもめげず、館内の模様替えや「図書館だより」の発行、図書委員会の運営など様々な挑戦が出来たのは、若さゆえの行動力とそれを応援して下さる学内の多くの方々の協力によるものです。

とくに館長は大変なアイデアマンで、この小さな図書館を変えようと自ら行動してくれます。最近は学内の教員・学生の活動状況を電車の吊り広告風に館内に掲示して、入館者増加を狙おうと意欲満々です。館長のおかげで館内もだいぶ風通しが良くなりました。

また、本学の図書館は前記の通り、図書室といった方が当てはまるようなこじんまりとした造りですので、時々「娯楽室」や「保健室」代わりになることもあります。その良し悪しは別として、色んな学生が足を運んでくれます。彼女たちとの交流の中で学んだことも多くありました。

本を通して学生と触れ合える喜びは、学校図書館でないと味わえないと思います。何年も前の卒業生が私に会いに学校に来てくれると、短大の司書で良かったと本当に思います。

司書になる前となってからでは、この仕事に対するイメージがかなり変わった気がします。大学で司書課程を取っていた頃は、司書の専門知識さえ身についていれば実務に支障はないだろうと考えていました。しかし実際は専門知識だけでは対処できない様々な場面に遭遇し、その度に躓き、悩み、人の助けを借りてきました。司書とは、その専門性以上に状況に応じた柔軟性が必要な仕事だと感じました。

限られた予算とスペースと人員で大学図書館の機能を維持していく難しさと、その壁を乗り越えていく楽しさもまたこの仕事ならではだと思います。

立ち塞がる壁はまだまだ沢山ありますが、多くの人に助けて頂きながらこれからも頑張っていきたいと思います。

司書という職業について

平成９年度国文学科卒業
櫻　井　陽　子

私が司書という職業に就いて、早くも１年が過ぎようとしています。

この「司書」という仕事は、利用者の立場から見れば大変に楽な仕事のように見えると思いますし、また、図書館や図書館業務を固定観念でとらえている人も大勢いるかと思います。

しかし、実際の図書館業務はそんなに安易なものではなく、固定観念が通用しないということを司書課程を受講される皆さんは知っているでしょうか。

私の就職した図書館は市立の小さな図書館ですが、それでも１日、400人を超える利用者が訪れます。公共の図書館ですから利用者の年齢層も広く、１歳くらいの赤ちゃんからお年寄りまで様々です。その利用者からの多種多様なレファレンス：自分の全く知らない学問分野、たとえば盆栽や寺社の建築技術について等の全く専門外のレファレンスであっても、司書と名のついた資格を持っている以上は「知りません」ではすまされません。それだけ責任の重い仕事なのです。

また、小さな子供の利用も多いため、館内はいつも騒然としており、図書館は静かなもの、というイメージは全く払拭されるほどの騒がしさです。しかし、市民の「憩の場」としての公共図書館が静かすぎては、逆に小さな子供連れのお母さん達には居心地の悪いものになってしまうでしょう。図書館は、必ずしも「静かでなければならない」という固定観念は通用しないのです。

資料についても、現在では図書だけではなく雑誌やAV資料を扱う図書館も多くなっています。ですから司書たるもの、取り扱っている雑誌の内容の把握や知識、そしてAV機器についての取り扱いも最低限知っていなければなりません。さらに、機械化の進む今の図書館の状況ではコンピュータ端末やCD-ROMを使いこなす技術も要求されます。図書館の司書なのに、機械の知識も必要なんて！と思われる方もいるでしょうが、現場では本当に必要なのです。

こんなことはほんの一例にすぎません。実際には数万冊、十数万冊（もしくはそれ以上）にのぼる資料の把握、新刊図書の分類・目録、カウンター業務、千数百冊を超える資料の貸出し・返却・配架、さらに移動図書館業務等々、司書として勉強しなければならない仕事は数えきれません。

…と、ここまで大変そうなことばかり書いてきましたが、その分司書というのはとてもやりがいのある仕事です。特に利用者の方に良い資料を提供でき、それを喜んでもらえた時は本当に嬉しく思います。司書として一番大切なものは利用者に対するサービスの気持ちです。貸出し・返却の際に「こんにちは」「ありがとうございました」と、一声かけるくらいの心配りと誠意が司書には必要なのではないでしょうか。

理論だけでは司書という仕事の実際は理解できないと思います。在学生の皆さんも機会があれば是非図書館での実習をもっと体験してみてください。必ず、何か得るものがあると思います。

私もまだ経験も浅く勉強不足ですが、利用者の方に少しでも良い資料を提供できるよう努力していこうと思っています。

図書館って何?! 司書って何?!

平成９年度文学部史学科卒業
相　部　吏　美

運良く?!“司書”という仕事に就けた私だったが、現実はそう甘くはなかった。というのが正直なところである。

「図書館の仕事は別に司書じやなくてもできる」とか「司書は必要ない」とか、世間ではまだまだ言われている。もっとひどいのになると「図書館がないと生活ができん訳じゃないからいらん！」など、ちょっと考えられないことを口にする人さえいる。そういうことを言われ始めると何がなんだか分からなくなってしまう。

しかし、どんなひどいことを言われても、少なくとも図書館の事を全く口にしない人よりかは、図書館に、司書という仕事に関心があるのだろう…と。じゃ、この人達にやっぱり図書館（司書）は必要、と思ってもらえるよう、一つ一つ問題の壁を取り除いていくしかないかと。最近やっとそう思えるようになってきた。就職した当時は辛くて辛くて仕方なかった。別に司書の資格なんていらんやんか！とよく思ったものだ。

確かに、司書の資格は必要単位をとりさえすれば取得できるわけで、他の資格より幾分か簡単に取得できる、というのは事実である。社会的に『準資格』といわれる理由もここにありそうではあるが。現在、ほとんどの公共図書館に勤務しようとする場合、一般行政で採用試験をし、数年後図書館へ異動、というように、司書の資格があろうがあるまいが関係ないような“たらい回し”的な人事をしていることにも問題はあると思う。司書の仕事は、３年やそこらで全うできる程、簡単なものではない。経験がものを言う仕事だと個人的には思っている。レファレンスにしても資料を知らなければ最適な資料の提供はできない。児童サービスにしても本の内容を知らなければ紹介できない。やればやるほど自分の肥しとなる、それが司書の仕事だと。

しかし、現在こうして図書館に勤務している私たち自身に一番の原因があるのかもしれない。司書というだけで、資格の上に安住していないだろうか。よく研修会で言われる。「多くの図書館で司書として働いている人たちがいるが、その中の何人が今も勉強しているだろうか。きっと殆どの司書が大学、短大で勉強しただけで社会に出てまで勉強してないだろう。そういう司書達が頑張っている仲間の足を引っ張っている。もっと周囲にアンテナをはって、自分自身が司書として向上しない限り、司書の前進はあり得ない」と。おっしゃる通り。

大学での勉強はほんの一部。基礎中の基礎でしかない。それを根に枝葉を自分の手でつけ花を咲かせるしかない。「大学で何を勉強しとったんやろうか？」と根さえぐらつくことがあるというのに。勉強なくして、何が司書か！と言われては…。奥の深い仕事だけに、勉強しなければならないことばかりである。司書といえば聞こえはいいみたいだが、実際は冷たい風が吹きすさんでいる。しかし、それを心地よい風に変えていくのが、図書館で働く私たちの一番しなければならない仕事かもしれない。と思う今日この頃である。